



普代村を通った柳田国男

東京都 医師 熊谷 文弥 (鳥居出身・73歳)

平成十四年六月、普代村図書館金子功氏からまたまた難題をいただいた。民族学者柳田国男(一八七五〜一九六二)が、その昔郷里普代村を通過しているようだから調べてくれるようにとのことであった。

前回は「宮澤賢治と普代村」であった。

これはあちらこちらからご協力の資料を取りまとめ「広報ふだい平成十四年五月号」に掲載して頂き報告した。

「広報」は「人事と通達」に「投稿」も加わったほうが読む人には楽しいことは確かであるが、忙しい者には本業以外の調査は必ずしも容易なことではない。しかしこれも愛する郷里のためと図書館調べを始めた。

新宿区立中央図書館によると、柳田国男全集二十八巻は一九九七から二〇〇一年まで四年がかりで刊行され、国立国会図書館他、二、三の大学図書館その他に入ったばかりとのことであった。

人を通じて慶応大学図書館所収の資料を入手した。

その後、柳田国男全集なるものを自分の目でも見たいと思ひ、新宿区立図書館九館のうちただ一館だけ、この全集を所蔵している四谷図書館を平成十四年七月二十七日土曜日午後、猛暑の中を訪問した。

いつの時代もどこの図書館も暑さ寒さにかかわらず勉強好きの人は大勢いるものであると感心した。

柳田国男全集第三巻「雪国の春」七

〇二頁に「処々の花」という項があり、萩、百合、女郎花、桔梗、葛花などの記載がある。ついで日時の記載は無く「宮古以北は野田の玉川あたりまで、いわば一続きの大長根である。ただ、是から流しだす山の水が多量なために、おりてはすぐ登る三四百尺の深い澤を幾筋となく設けて行人を悩ますだけである。…」

と記述され、普代村という固有名詞は出てこないが宮古以北の野田玉川あたりまで沢々の深いことを身をもって体験している

柳田国男先生は三陸地方には一度ならず旅をしておられるようであり、「清光館哀史」という項には「何とということなしに陸中八木の終点駅まで来てしまった。…」などという文も見える。

久慈町(現久慈市)が八戸線の終点になったのは昭和五年(一九三〇)でありそれまでは八木が終点であるからそれ以前のことである。興味あるのは旧盆のころ訪れたこともあるようで、

普代地方でも唄う盆唄
 なにやとやれ、
 について、この唄は何度聞いてもわからない。土地の人に聞いてもわからない。
 「よし、今日はひとつ確かめておくべし」
 などと書いておられるのが誠に面白い。

柳田先生は次のように解釈された。
 「なにやとやれ」

なにやとなされのうの二行について、どう考えてみたところ、こればかりの短い誌形に、そうむつかしい情緒が盛られるようわけが無い。要するに
 なんなりともせよかし
 どうなりともなさるがよい
 と男に向かって呼びかけた恋唄である」とある。

この項の最後に(大正十五年九月文芸春秋)とあった。この盆唄の意味を筆者も始めて知った。

普代地方では唄い始めがいきなり
 なにやとやれ、
 では入りにくいので
 そうりやさ、なにやとやれ、
 と

そうりやさ、といふかけ言葉を頭に
 入れているし
 なにやとやれ、
 では、「にや」が発音しにくいので
 ななとやれ、とも唄っている。ついで

ななとやれ、と唄い易くしてから、
 「再び
 ななとやれ、とおわる。
 所により替え唄なども作られ
 「オラが若いときや田代まで通った
 今の若いもんわの色気なし」
 などというのもある。

金子功氏のご命令が有益にふさわしい読み物になれば幸いである。平成十四年七月二十八日
 (参考文献 柳田国男全集第三巻 筑摩書房 一九九七)